



John Imbrie and
Katherine P. Imbrie

ICE AGES
SOLVING THE MYSTERY

Harvard Univ. Press 224 頁, ¥2,280 円 (86 年
7 月現在)

本書は 1979 年に Enslow 社からハードパウンド版で出版されたものが、Harvard 大学出版によってペーパーバック化されたものである。初版当時すでにアメリカ気象学会誌 (1979 年 11 月号) にコロラド大学極地研究教授 Barry 氏による書評が載っているが、私は今回のペーパーバック版に対して、今日の時点での所見をのべたい。著者の John は Brown 大学の海洋学教授、Katherine (John の娘さん) は科学ライターである。初版当時のアメリカ気象学会誌には「氷河期についてのポピュラーブック」であるという出版紹介が載せられているが、内容は日本流に言えば、講談社ブルーバックスというところかも知れない。しかし内容は決して俗っぽいものではなく、学術書として充分価値のあるものである。なにより嬉しいのは 146×234 ミリという判に大きな活字で、挿入されている図版はいずれも線太に大きく明瞭に画かれていて大変読みやすいことである。書かれている内容は 19 世紀中ごろにおける氷河期という時代の認識から今日までの氷河期についての科学的認識であって、その多くの頁を J. Croll の天文学説と Milankovitch の活躍にあてている。特にこの二人については伝記風に書かれており、この辺が協力者 Katherine の筆であろう。

第一部 (1~3 章) は「氷河期の発見」と題されているとおり、19 世紀における氷河期の存在の発見がのべら

れている。第二部 (4~15 章) は「氷河期の説明」と題されて全体の 63% 強の頁数をあてている。内容は気候変化における天文学的原因説が主である。つまり、黄道面に対しての地軸の傾きの変化、地球の公転軌道 (離心率) の変化に伴う 6 月における太陽と地球との距離の変化である。ここでスコットランドの独学で研究者となった J. Croll について語られ、今日使用されている新世代における地史の新しい分類 (晩新世、始新世……) があって、ユーゴスラビアの数学者 Milankovitch の登場となる。彼は、緯度 75°, 45°, 15° について 60 万年にさかのぼっての放射曲線を計算した。そして、ウルム、リス、ミンデル、ギュンツの各氷期に相当する低温期を見出し、2 万 2 千年の歳差周期が二つの低緯度曲線において明瞭であることを見出す。

さらに本書はその後の深海コアによる研究や地磁気の逆転の問題へと発展して行く。そして第三部 (16 章) は未来の氷河期について論じている。これに関しては異なった研究者の数葉の図版をあげている。なかには大変興味のある図もあるが、あまり詳細にのべてしまうのは著者に対していささか気がひけるのでそれは控えておこう。

本書の主流となっている天文学的原因説などについては、この方面に関心のある者にとっては既知のことであろうが、著者は今回ペーパーバック版を出すにあたって、その後の発見や文献について加筆している。本書はこの方面の研究者にとっては一読に値するものであり、今後とも長くその価値は変わらないと思われる。だからこそ Harvard 大学がペーパーバック版としたのであろう。以下私ごとであるが、私は夏休みのはじめに洋書店頭で見つけ、夏休みの読みものとした次第である。

(島田守家)

月例会「長期予報と大気大循環」の講演募集のお知らせ

標記月例会を下記のとおり開催いたしますので奮ってご応募ください。

記

日 時: 1987 年 2 月 23 日 (月) 13:00~17:00

場 所: 気象庁

申込方法: 題目、講演者氏名、所属と要旨を 400 字以内

にまとめて提出

申込先: 〒100 東京都千代田区大手町 1-3-4

気象庁予報部長期予報課 重久陽亮

電話 03-212-8341 (内線 330)

講演申込締切日: 1986 年 12 月 16 日